

まふ で KO SO!

過去の記事は  
こちら

## 若い性の悩み 同世代が支援

岐阜大学の医学部看護学科には「ピアカウンセリング同好会」という学生サークルがある。仲間や対等者を意味する「ピア」の名の通り、中学生から大学生までの年齢が近い人の立場を生かした活動を2002年から行っている。

中学校や高校などに出向いて、性の悩みや、妊娠・出産をするための人生設計、性感染症（STD）予防、望まない妊娠予防などの相談に乗ったり、助言をしたりする「性=生の健康教育、自尊感情を育む心の相談活動」を行っている。参加者からは「最初は恥ずかしかったけれど、自身のことについて理解できるようになった」などの声が寄せられている。



「ピアカウンセリング同好会」のメンバーたち（岐阜大で）

この活動を通して「性の問題を友人や交流サイト（SNS）上で知らない人に相談する」「さまざまな生活背景の中で進路選択に迷う」「自己肯定感が低い」といった中高生の意識が浮き彫りになった。そこで県内の高校の生徒を対象に、性に関

する意識や知識のWEBアンケートを行った。

その結果、「現在、好きな人がいるとして、その人から『性交すること』を求められたらどうしますか」という質問には、学年が上がるにしたがって容認する人の割合が高くなった。



小林和成さん

「ピルを使用しても性感染症やエイズウイルス（HIV）感染の予防にはならない」「性同一性障害とは、性の自己意識と生物学的性別が一致しない状態のことをいう」という問いの正答率は2年生で高く1年生で低かった。答えはいずれも「○」だ。「新薬の開発により、HIVの感染から発症までの期間を長くすることが可能になった」なども同様の傾向だった。

性自認は「女性」が半数を占め、「男性」35.2%、性別が男女の間にあると考えている「ノンバイナリー」が6.8%、個別の性的指向にとらわれない「Xジェンダー」が2.3%だった。これはLGBT総合研究所（東京）が、全国の20～69歳の男女、計約34万8千人から回答を得た調査と類似しており、高校生でも性の多様性があることがわかる。

文部科学省の「学習指導要領」では、性感染症などを学ぶのは高校の1年生か2年生となっている。性に関する不確かな情報があふれる現代では、低学年のころから段階的に意識や知識を高めることが重要と考える。また、性自認については、多様な性を有する人への教育内容や方法の工夫、関係団体との協力が一層求められている。

同好会は一つの支援団体とはいえ、年齢の近い者同士が本音をさらけ出し、相談や健康教育などを行っている。そうした点で保健師など専門職の支援と異なっていて、親子保健活動での期待は大きい。今後も学校の特徴や時代に即した活動で、参加者が自分で問題解決をするための知識を提供し、自ら判断し決定する力を育てる手助けをしていきたい。

こばやし・かずなり 岐阜大医学部看護学科准教授。ピアカウンセリング同好会顧問。専門は地域看護学。名古屋大学大学院博士後期課程修了（看護学博士）。1978年生まれ。



程修了（看護学博士）。1978年生まれ。